伝え

日本口承文芸学会　会報

【伝え】　第30号　2002年 4月

発行　日本口承文芸学会
〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學文学部　伝承文学研究室内
TEL　03-5466-0224

現状と展望－中・四国地方の例から－

白石　昭臣

近年、当（中・四国）地域では、民話などの伝承を㋑新たな視点からの採集をも含め、これを整理して、多くの人々に公開するもの　㋺伝説、昔話をもとに、その地域の風土に適応した新たな創作に向かう　㋩地域に息づく伝承を、話形や内容により類型化する、あるいはその系譜と特色を明らかにしようとする、この3つの傾向がみられる。このなかの㋑では、夙に民話採集に取り組んできた立石憲利の着実な活動が挙げられる。立石は、かつて一般に慣行化していたモラ（貰）イブロ（風呂）のなかで交わされる伝承に注目する。このお風呂場ばなしをまとめるなど、身近にありながら見落されていた伝承の場をもとにフィルドワークを重ね、アイデンティティを求めて研究の展開をはかっている。立石の居住する岡山県では、このような伝承を広く伝えようとする動きも活発で中国山地のただ中、久米郡旭町には民話の村が誕生している。「花咲爺さんの民話広場」「民話体験小屋」の他に、アジア各地の民話をインターネットとイベントで紹介し、各地の人々との交流をすすめる「アジア電子民話館」もみられる。これはANOA（国際医療ボランティア団体）の助力によるものであるが、地元の多くの民話愛好者や研究者の力も見逃せない。

島根県松江市大庭町の「出雲かんべの里」も同様である。ここでは神話、伝説、昔話を映像化して公開するとともに、イロリを囲んで、年長の語りべが、これらの伝承を幼児や小中学生を含む多くの人々に語りかけている。

㋺の伝説、昔話をもとにした創作活動では、石見地方に語り継がれているヤマンバ（山姥）、瓜子姫、河童などの昔話と各地の伝説を集めて文字化、絵本化し、音響を伴う映像化をはかる活動が目をひく。これらをもとに脚本化して演劇活動をも試みる。「新石見風土記製作委員会」という団体が行なうもので、地元の民話愛好者の他に作家の豊田有恒、映像プロデューサーの瓜生忠久らも参加して、活動をはじめている。

㋩の研究動向の例として、前々回のこの欄に筆者は酒井董美などのアジア民間説話学会での活動を挙げたが、酒井はまた、山陰地方のわらべ歌の採集と整理に努め、一方、ダムに沈む江津市波積地区の調査に筆者ともども携っている。このような採集、総括のなかで、主に中国地方の風名とそれに伴う伝承を丹念に採集し、ことばが象徴するその意味と働きをとおしてその地域の生活に根ざした世界観を描く室山敏昭（比治山大）の方法にひかれるものがある。室山は文化言語学を手がけているが、構造主義的なアプローチは、口承文芸の研究にも適応の可能性を思わせる。筆者（私）も、近年、石見地方で得た千将（かんしょう）鍛鋤（はくや）の産鉄伝承をこの方法で説明しようと試みている。㋑㋺の採集と整理、公開と展開、㋩の研究の三者が一体となる地域ごとの場が望まれる。

（島根県）

第42回研究例会報告
シンポジウム「書承から口承へ—伝承はほろびるか—」

飯倉　義之

第42回研究例会（2001．9．22．　於・國學院大學）は「書承から口承へ—伝承はほろびるか—」と題して、シンポジウム形式で行なわれた。

大島広志氏の「書承から口承へ」はいわば基調報告で、近代においてグリムなど、本から得られた話が口承の話に取り入れられた過程を踏まえた上で、自ら聞き知った話を語る「伝承の語り手」、伝承した話も本で読み憶えた話も語る「方言の語り手」、新たに語りを習ってはじめた「共通語の語り手」の三者が存在する、現在の昔話の語り手の状況を述べた。

続いて櫻井美紀氏が「新たな語りの現状」で日本と世界のストーリーテリングの現状を、語り手養成講座と語り口研究の動向を中心に報告。ストーリーテリングが国際的にもセラピー、ヒーリング（いま流行の「癒し」）という文脈で語られていることを述べた。

小野和子氏は「うつくしま未来博の語り」で2001年夏に福島県で開催された〈うつくしま未来博〉の人気パビリオン「からくり民話茶屋」企画運営の経緯を語り部養成スクールの活動を含めて報告。民話と語りのイベントの優れた具体例を示した。

根岸英之氏は「子どもたちの語り－市川の学校教育の場を事例に－」において子どもたちの語りの現状を、特に子どもたちが本を介在にして話を「読む」「書く」行為ととらえている面に注目して報告した。

学生の聴講も目立ち、会場の雰囲気もいつもより若いように思われた。後半の討論も、パネリストの間だけでなくフロアも交えて活発に行なわれ、現在の語り手をめぐる問題への関心の高さがうかがわれた。

一つ残念な点があるとすれば、「伝承の語り手」を相手にしておられる方々の出席が少なかったことではないだろうか。「伝承の語り」を重視する立場から「方言の語り」「共通語の語り」をどう見るか、両者の抱える問題は何か等の意見の交換ができれば、シンポジウムの意義はさらに深まったものと思われる。

（千葉県）

竹内　邦孔

第42回例会は9月22日に國學院大学で「書承から口承へ—伝承はほろびるか—」というテーマで行われた。

まずは大島広志氏が基調報告として、表題に関する学会の見解の動向を述べ、さらに近代において書承が口承に取り入れられてきた例をふまえて、現在の語り手には「地方の語り手」と「都市の語り手」があり、それぞれに「伝承の語り手」と、伝承も本も語る「方言の語り手」がおり、そして後者にはさらに、語りを学び共通語で語る「共通語の語り手」を加えている。また、学んできた語りを自分で取り込んで語っている「伝承の語り手」もいるという現状を提示した。

次にパネリストとして櫻井美紀氏が「新たな語りの現状」と題し、ストーリーテリングをヒーリングやセラピーに利用する語り手養成講座の世界的な動向のなかでの、日本の活動を紹介した。また今後の研究のために、「未来学」としての学問の視野をもつこと、現代の語り手の語り口研究の方法を探ることをあげ、特に、イメージ訓練によって自分流の語り変えがどう変化するかという研究の取り組みを、実際にその録音を流して会場で示した。

そして小野和子氏は、この例会に開催中だったうつくしま未来博の「からくり民話茶屋」運営の経緯を丁寧に報告し、それは文字化された話を「地方の語り手」が覚えて、それぞれに個性をだしていくという、まさに書承から口承へというその一端をのぞかせる状況の報告ともなっていた。

根岸英之氏は自らの実践から、子どもたちの語りが、まず「読む」ことから始まっているという指摘や、「書く」ことによって口承世界の形象化が図られているという報告をした。

今回の例会は、パネリストたちが指摘する現状があることは認めながらも、「伝承の語り」と「新たな語り」という線引きがなされ、それぞれの立脚する立場からの意見がかみ合わずに終わってしまったのが残念だったが、会員外の参加が多く、それぞれの実践に基づいた報告がされたことから、実際に語りをしている方々からの発言が会場からもなされ、根本に「語り」という問題意識をもって活動している者同士の開かれた意見交換の場としては最適だったと思う。（東京都）

第43回研究例会報告（2001. 12. 15）
「語られた異界」

柏村　裕子

今回の研究例会では「異界」について、伝承と絵画および創作ファンタジーの立場から発表があり、広く「異界」のイメージを再検討する試みがなされた。

加藤耕義氏は、ドイツの昔話と伝説における異界イメージの比較をおこなった。その結果、暗い場所を通過し明るい異界へ至る道筋や人間が異界から宝を持ちかえるという話の筋は両者に共通するが、異界がある場所や異界を訪れた人間の運命は大きく異なることを明らかにした。また伝説の構造に照らすと、昔話の森そのものは異界へ至る道や異界の者と出会う場所としてあらわれることが多く、森の奥にある家や城が異界であることが多いと指摘した。

新島翠氏は、中国（特に雲南地方）の伝承を、異界と人間界の区別があいまいな話と、人間界と異界が明確に別れている話に分けて紹介した。さらに後者は他所から伝播した話ではないかと述べた。

沼賀美奈子氏は、江戸時代から現代までの「舌切り雀」絵本を取り上げ、動物の頭と人間の体を組み合わせて動物を描く擬人化の伝統や、異界が日常的な遊里の世界を模して描かれてきた事実を示した。

川越ゆり氏は、イギリスの創作ファンタジーにおける非日常*と日常の関係を3分類した（*川越氏は「異界」ではなく「非日常」という言葉を用いた）。すなわち、非日常世界からmagicalな登場人物が来訪するパターン、日常の登場人物が非日常世界を訪問するパターン、時間移動により過去が非日常世界となるパターンである。この分類は、伝承における人間と異界の関係を考えるうえでも参考になるだろう。

質疑応答では、会場からも様々な国の伝承における異界の所在や移動方法についての指摘があった。また、創作ファンタジーの発達と国民性の関係についてや、絵画化される場合に話によって動物の擬人化の度合いが異なるのではないかという点にまで話は及んだ。異界について学際的な研究が必要なことが示された。

（埼玉県）

《各地からの報告》
口承文芸にかかわる北海道の動向

奥田　統己

高橋宣勝先生が10月28日に亡くなられた。享年59歳。

8月末ごろに、先生が検査のために入院なさったという連絡をご家族からいただいた。私の勤務校の夏のリレー講座［北海道文化論］に一日ご出講いただく予定だったので、それが無理になったことをお知らせくださったのである。お見舞いにうかがいたいと申し上げたが、ただの検査なので、と病院の名も教えていただけなかった。葬儀の挨拶を聞いていると、亡くなる間近の姿で人に会いたくないという本人のご意思があったそうである。

『語られざるかぐやひめ』（大修館書店、1996）『イギリスに伝わる怖い話』（大和書房、2000）「『大工と鬼六』は日本の民話か」（『口承文芸研究』11、1988）などの先生の論著は、お人柄のとおりの平明でやわらかな文体のなかに、問題設定と資料操作とへの透明な意識が表れたものである。先生のご紹介で『北海道の口承文芸』（北海道・北海道新聞社、1998）の仕事をご一緒したときにも、北海道の日本語の口承文芸に研究としての方向性を与えたい、というお考えを繰り返しお聞きした。内容面でも体制面でも、北海道の口承文芸研究にとっての打撃は大きい。

1997年の法律制定以後のアイヌ文化の混乱は今なお続いている。高橋先生の思い出と並べて述べるのは申し訳ないが、混乱の一端は皮相なかたちでマスコミにも流れるようになった。巨大事業としての思惑を呼ぶ「伝統的生活空間」構想や博物館構想も迷走している。

この法律とその運営体制への私の批判に対しては、「悪いのは体制ではなく人的要素である」という反論もこの間あった。さて法律制定に深く関わった国会議員は世論の集中砲火を浴びていったん表舞台から退くようすであり、アイヌ民族側の陣容にも変化があった。私の見通しが正しいのか反論が正しいのか、取り返しのつかないかたちでの検証が始まる。　（北海道）

「観光」と民話……栃木県 那須・日光

如月　六日

観光において語られる民話といえばただちに遠野が浮かぶが、その町起こしアイディアの成功は北関東の地にも学びとられている。

栃木県那須温泉の公共宿泊施設・休暇村那須と温泉街の旅館やホテルで宿泊者向けに民話の語りが行なわれている。それは4年前、同町の語りのグループ「那須のかたりべ」の活動に休暇村の職員が目をとめたことに始まり、温泉街の宿へと広がったものだ。那須温泉にはいわゆる温泉地の娯楽というものがない、民話の語りは観光地としては静かすぎる夜の時間を埋める役割として注目されたのである。「休暇村那須」での語りは毎金曜夜に1時間ほど行なわれる。話は再話本をもとにして付近の伝説を中心にしているが、民話の少ない土地ゆえ他地方の話もまじえて語っているという。温泉街の旅館やホテルでは殺生石伝説に材をとって作られた九尾太鼓のパフォーマンスも加わった民話の語りも披露される。聞き手は個人客から修学旅行の小中高校生、団体旅行客など様々だという。また単発的な依頼に応じて、宿に出向いてもいるという。

修学旅行の小学生に民話の提供を考えたのが日光である。日光山内には年間約6000人の小学生が修学旅行で宿泊するほか、東京や横浜の小学校の林間学校がある。そうした小学生に神話や伝説を聞かせ見学地の解説の充実に、また夜の時間対策にと始まって2年になる。発端は事前調査の先生との話から市の関係者が提案したものだという。語りは1時間、宿のほか昼間は見学コースの美術館でも行なわれる。利用は全体の1割、年間10回程度にとどまるが、これは語り手側の事情からだという。話は神話や伝説を中心に語り手が台本を作って語ることが多く、また民話が少ない土地柄から他地方の話をまじえていると、この点でも那須温泉と同様である。今、日光の観光向けの民話語りは中禅寺宿泊の修学旅行生に、日光湯元ではハイキング客などに向けてと広がりを見せている。　（栃木県）

市民立ち上げの長岡昔話大会

吉川　祐子

中部地方は、2001年8月18日に新潟県長岡市で開かれた昔話大会について報告する。

「東北の昔話in長岡」と題して東北5県から語り手を集めて行われた本企画は、長岡市民立ち上げの企画だった。企画団体は瞽女唄ネットワーク（会長　鈴木昭英氏）で、長岡を中心に瞽女唄芸の伝承と、瞽女唄の魅力に親しむために結成された団体である。その活動は瞽女唄に限らず、同じ口承文芸の昔話にも向けられ、語り手を発掘し語りの場の設定をして、語りの実演を実施してきた実績を持つ。この経験を生かして、今回の大企画を立ち上がらせた。

参加県は新潟県をはじめ、秋田・岩手・山形・宮城の5県で、静岡県人の筆者にとっては、どの県の言葉も東北弁と一括してしまう言葉の競演である。しかし、これら5県とも詳細には言葉が異なり、せっかくの語りにもかかわらず語意が理解できないのではという配慮から、それぞれの語り手に研究者の解説を付けたのがこんにち的で新しく、聞き手に優しい企画だった。そうした配慮があってか、会場は立ち席もできるほどの満員御礼状態で、夏の暑い一日、昔話を堪能したのだった。

こんにちでは文字化した資料ほどに語り手の数は確保できず、伝承能力に限界が来ている。かつて、岩倉市郎や水沢謙一が活躍して、いい資料を発掘してきた新潟でさえも、こうしたチャンスがなければ日常生活では昔話に触れられない。しかも、選び抜いて招待したはずの語り手の中には、すでに民俗の語り手とはいえない語り手さえもいた。純粋昔話が聞けなくなるのは遠い将来のことではない。瞽女唄ネットワークの企画が、新潟の昔話伝承復活の起爆剤になればと願わずにはいられない。

それにしても、野にあって無名に生き続けてきた昔話だけに、市民が立ち上げるという本企画は理に叶ったものだったといえる。行政絡みでは純粋昔話の伝承は限界が見える。すでに、そうした限界から抜け出せないで問題を抱えてしまっているマチもある。21世紀の昔話伝承の大問題である。　（静岡県）

2001年　近畿地方の口承文芸に関する活動紹介

斎藤　純

奈良県在住・勤務の筆者周辺の活動を報告する。

3月15日（木）～6月5日（火）、大阪の国立民族学博物館で企画展『大正昭和くらしの博物誌　民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム展』。民具の展示だが、副題の渋沢とアチックの活動がテーマ。折口信夫・早川孝太郎・岩倉市郎などアチック同人には口承文芸での業績も。その活躍の背景を知る上でアチックの理解は必須。解説書の近藤雅樹編『図説　大正昭和くらしの博物誌』は河出書房新社から出版。特集は『月刊みんぱく』25－4、『季刊民族学』96など。

5月5日（土）、奈良県橿原文化会館で「桃太郎サミット田原本大会」。同実行委員会の主催で、桃太郎誕生地を主張する磯城郡田原本町の役場・商工会・観光協会が共催。シンポジウム「知られざる『桃太郎』たちへ」には野村純一氏も出席。時間制限と地元配慮による古代史と桃太郎をつなぐ無批判な論調中、野村氏は桃太郎が新しい昔話であると説明。さるパネラーが町内に桃太郎伝承地を造るよう述べたのに対して「考古学者がモノを造っていいのですか」。旧石器捏造事件の記憶の中、かなりの皮肉だが、それでも効果は如何。

8月25日（土）～27日（日）、奈良教育大学で比較民話研究会の合宿。ここ数年、花園大学・古典と民俗の会と共同で行ってきた奈良市民話調査の春・夏恒例の整理翻字作業（3月にも実施）。旧市街のならまち、山間の柳生・田原地区、丘陵部の押熊地区のデータで、伝説・世間話が多い。適切な発表方法を思案中。

12月24日（日）、奈良教育大で歌謡研究会・比較民話研究会の合同研究会。年末恒例の研究交流会は有益。

なお、9月14日から大阪外国語大学の奥西峻介氏がハンガリー・ブタペスト大学の日本語教育日本研究の国際シンポジウムで「カッパの手」と題する報告。異人・聖人の切られた手を祀る話の比較民俗学。また同外大の竹原新氏は12月末に労作『イランの口承文芸－現地調査と研究－』渓水社を出版。　（奈良県）

ラジオと口承文芸存在

矢口　裕康

宮崎県における口承文芸に関する一試みについて報告したい。口承文芸は、本来、語り手による音声言語である。私達は、語り手から聴き取った話を忠実にテープから起こし、文字言語で表現することに努めてきた。しかし、いくら忠実にといっても、語り手が語っている際の空間や表情しぐさまでを文字化する中で具体化することは不可能であろう。ということでカセットテープ・レコード・CDという形で語りにより近づく試みもなされてきた。

さて口承文芸の今後として資料として記録する以外に、どのようなことを試行してゆけばよいのであろうか。私は女子短大に勤めているが、保母さん・幼稚園・小中学校の先生へと就職する学生もたくさんいるので、子どもとの出会いの中での語りの再生を、25年近く学生と共に具体化してきた。もちろん母親としての語りへともつながることをみすえての試みである。この試みは『語りを現代に』（エイデル研究所）の中でも表明してきた。その中、1998年4月～2000年3月までMRT宮崎放送で、宮崎県の昔話を素材とした「日向知っちょるけ話」に関わる機会を得た。ラジオ番組であったことも幸いして、語りを耳をとおして心そして目へと訴える試みとして具体化していった。15分位の番組であるが、MRTラジオの長寿番組「くらしのレーダー・元気のでる話コーナー」として、毎週金曜日朝76回の放送であった。基本的には、私が選んだ昔話を、男女のアナウンサーが語り合う形にディレクターが台本化し、その前後に私が解説をほどこすという形をとってきた。語り手の昔話は一人語りであるが、男女の声質の違う二人が語ることで、その話の持ち味を描き出せたように思う。この一端を「ラジオで伝えた宮崎民話（上）」（宮崎女子短期大学紀要第27号）としてまとめてみた。ラジオを活用しての口承文芸存在の提示、今後も試みていくべきであろう。　（宮崎県）

口承文芸の周辺　2001年・沖縄

伊藝　弘子

沖縄における口承文芸にかかわる1年間を報告する。

2月20日・21日、6月30日・7月1日に小澤俊夫先生による「沖縄昔ばなし大学」の第1期基礎コース第5回目・第6回目が遠藤庄治実行委員長のもとで開催され、100人をこす受講生が3年にわたる長丁場を無事に終了した。

沖縄民俗学会公開月例会での口承文芸にかかわるプログラムでは、1月20日に「粟国島のヤガン・ヲィユミは何を内包しているかー伝承とコネリ唄の分析からー」南島地名研究センターの久手堅憲夫氏。3月は「宮古諸島佐良浜の民間巫者ムヌスーツカサとムヌスー」東資子さん（琉球大学大学院）。「憑依を喪失した身体とその表象－鹿児島県トカラ列島口の島霜月祭りにおけるネーシを事例に」竹村嘉晃さん（沖縄県立芸術大学大学院）。7月は「久高島・男と女の民俗誌・序論」を琉 球大学の赤嶺政信先生。9月も琉球大学の大胡太郎先生による「多良間・水納のスツウプナカ」の映像記録化・映像を読む。12月は「伝承論からみた口承説話－韓国済州島の調査事例よりー」を琉球大学の鈴木寛之先生。

奄美沖縄民間文芸学会2001年度大会は8月4日5日に沖永良部島で開催された。公開講演会では「エラブから見えてくるものー島の歴史と文化」を沖永良部郷土研究会の先田光演さん。「八重山の来訪神」を国学院短期大学の狩俣恵一先生。「琉球弧の葬送歌の特質－沖永良部島と与那国島の事例から」を川村学園女子大学の酒井正子先生。研究発表では「口承文芸としての琉歌ー物語と作者伝承ー」を琉大大学院の新里彩さん。「沖縄の説話文学『遺老説伝』を中心に」を駱淑蓉さん。「沖永良部島の村踊り」を早稲田大学大学院の高橋孝代さん。「創世オモロをめぐって」を沖縄尚学高校の上原孝三先生。公開シンポジウムでは「ノロの死をめぐる伝承」を奄美郷土研究会の高橋一郎さん。「徳之島の口説にみる悲劇伝承」を徳之島郷土研究会の松山光秀さん。「世之主伝説をめぐって」を沖永良部郷土研究会の先田光演さん。「与論島の英雄伝説とその周辺の事情」を瀬戸内町立図書館郷土館の登山修先生。12月22日・23日には「絵本ワールドＩＮおきなわ」が開催され、さまざまなプログラムがあり、世界の昔ばなし・沖縄方言の語りなどが披露され、参加した親子をよろこばせた。　（沖縄県）

＊　＊　＊

《ご案内》

第18回〈東京の夏〉音楽祭2002

—音楽と文学— 7月2日（火）～7月27日（土）

＊

・琵琶にみる中世文学と音楽（日本の音楽と文学１）

物語を謡いながら奏する琵琶楽。

平家琵琶、薩摩琵琶、筑前琵琶の名手が一堂に会し、

その真髄を披露する。

めったに聴くことのできない俗謡の競演も楽しみ。

・7月12日（金）7:00p.m.～

・草月ホール（電話 03-3408-9113）

・全席自由 ¥3000

＊

兵藤裕己（レクチャー）

甲斐天薫（平家琵琶）「那須与一」

後藤幸浩（薩摩琵琶）「那須与一」

片山旭星（筑前琵琶）「壇ノ浦」ほか

［企画構成］兵藤裕己

・主催：アリオン音楽財団

TEL 03-3400-5052 FAX 03-3400-5063

ホームページ http://www.arion-edo.org

＊

（企画構成・レクチャーの兵藤裕己氏は日本口承文芸学会会員です。この音楽祭のチケットは例年発売と同時に完売してしまいます。４月23日午前10時より一般発売開始です。）

《「伝え」編集担当からのお願い》

・「伝え」第31号の発行は10月（予定）です。

・「各地からの報告」をお寄せください。

・会員が企画・出演・発表する口承文芸に関する国内外の催し物（11月～来年４月）の情報をお寄せください。

＊ ＊ ＊

事務局より

【新入会】

（東京）加藤耕義・川越ゆり・佐々木睦・高塚明恵・沼賀美奈子　（愛知）逵　志保

（大阪）藤井麻湖

【団体新入会】

（東京）白百合女子大学図書館

【改　姓】

（千葉）川井麻紀　→　川野麻紀

【退　会】

（秋田）野添憲治　（石川）菊田正信　（福島）鹿野正夫　（東京）後藤　淑

（京都）平山敏治郎　（兵庫）前田禮子　（熊本）横田幸子　（鹿児島）村田　熙

【物　故】

（北海道）高橋宣勝

【連絡先不明】

・姜　竣　・桜井雅人　・鄭　元真　・橋本嘉那子　・山田真史　・森　博史

※お心当たりの方は、事務局までご一報下さいますようお願いいたします。

住所変更などがありましたら、事務局までご連絡をいただくようお願いいたします。

第２６回日本口承文藝學會大会を、６月１日（土）、２日（日）の両日にわたって、東京学芸大学（東京都小金井市）で開催いたします。多数のご出席をお待ちいたしております。お誘い合わせの上お出かけ下さい。新入会員の方をご紹介下さい。

☆日本口承文藝学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金　1000 円、年会費 4000 円です。 入会申込書の請求は下記の事務局まで。

〒 150-8440 東京都渋谷区東４－ 10 － 28

國學院大学文学部伝承文学研究室（野村教授）内

日本口承文藝学会事務局

※郵便以外での問い合わせは、事務局担当の磯沼重治まで。

Tel・Fax：０４２６－３７－２０７５

E-mail ：kousyoubunngei@k5.dion.ne.jp

※送金先は、［郵便振替］００１８０－４－４４８３４　です。

The Society for Folk- Narrative Rescarch of Japan

c/o Prof. J. Nonura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒 150-8440, Japan

口承文藝に関心のある方をひろくご紹介ください。

☆「伝え」編集担当は、米屋陽一・大島建彦・白石昭臣・武田　正です